環境新聞　平成27年（2015年）10月28日付

緊急インタビュー　グローバルウォータジャパン代表

吉村 和就 氏に聞く

「知られざる北朝鮮の水事情」

電力不足の解消が急務

グローバルウォータジャパン代表で国連環境アドバイザーも務める、水問題の専門家吉村和就氏が6～10日の5日間、北朝鮮を訪問した。そこで帰国後、「知られざる北朝鮮の水事情」について緊急インタビューを行った。

（聞き手・野田宜践）

視察はドタキャンに

――北朝鮮に行った目的は。

「もちろん、水問題の調査である。国連本部勤務時代から多くの途上国や紛争国の水問題解決に努力してきたが、北朝鮮の水問題に関しての信頼できる情報が極端に少ない。独裁政権であれ、軍事政権であれ、水問題は国民の命に直結する最大の課題である。現地入りし自分の目と足で直接確認したかった」

――確認できたのか。

「事前に対外文化協会に視察の目的として、①水の責任者と面談できること②水源、浄水場、下水処理場など水関連施設の撮影ができること③上記が達成された場合、その内容を公表する許可する――の3点を要望した。

朝鮮総連の担当者からは事前に『問題ありません』、また平壌空港で迎えに来た幹部からも同様の答えを得ていた。ところが、当日の朝、案内人から『先方の都合で予定はキャンセルになりました。今日は市内観光です』と。ドタキャン。再度理由を聞いても『先方の都合』とか『軍事パレードの影響』と繰り返され、結局視察できなかった。

その代わりに平壌市内と軍事境界線である板門店、太陽宮殿（金日成、金正日の遺体が永久保存されている施設）、宇宙科学者住宅、近代共同農場、古墳等を視察した。

平壌市内は高層ビルが林立し、幹線道路は片側3車線交通渋滞もなく快適、トロリーバスや電車が走り、多くの人々はキチンと整列し乗車している。街中の女性もハイヒールやカラフルな服装、ごみが落ちていない歩道、空気がきれいなど日本のマスコミが報道しない日常を見て驚きである。まさに金親子が平壌を『世界最高の都市つくりを目指す』と豪語しただけのことがあると感心した。しかし街中至る所に軍人が立っており、あらゆる場所が思想教育の場となっている。

一方、板門店に行く途中の農村部をバスの中から見ると、秋田で育ち小さいころから水田や畑を見てきた私の目には、やせ細った水田や畑地が目につく、ヤギや牛のあばら骨が浮き出ている。人間だけではなく、家畜にも十分な食糧が届いていない。河川にも水が少ない事が気にかかった（写真1）」

下水は河川に放流

――北朝鮮の水資源の状況は。

「平壌での年間降雨量は例年1千～1200ミリであり、水インフラがしっかりしていれば国民（約2400万人）が水の困ることがない。しかし洪水や干ばつが頻発しており、例えば2009年の洪水では100万人以上に被害が発生、また昨年の平均降水量は平年の57％であり深刻な干ばつに直面し農作物に重大な被害が出た。

北朝鮮当局は今年の初めから『コメとトウモロコシを主体とする食糧』を住民一人当たり380㌘配給しているが、国連が推奨する最低基準、1人1日当たり600㌘を大きく下回っている。このため国連食糧計画（WFP）は3月に76万人、4月には80万人に食糧を援助したが、これは目標人数の4割に過ぎない」

――北朝鮮の水道、生活排水の実態は。

「平壌市内（約220万人居住）のビルやホテル、住宅には水道が完備されているが、常時水が出ないことが多い。これは電力不足でポンプが稼働できないからである。市内のビルやレストランのトイレには大きな水タンクが常設され、用を足した後、ひしゃくで水を汲み流すことである（写真2）。下水は処理場はあるものの、普通江に無処理で放流されている。

平壌では地域や季節により頻繁に停電がある。もちろん国家機関や労働党・軍の幹部が生活する居住区、外国人が宿泊するホテルは優先的に配電され、また各施設で自家発電設備を有している。

一方、板門店までの3時間の移動中、農村部（2000万人居住）には水道施設らしきものは一切なく、河川や地下水に頼っているものと思われる。当然ながら汚水処理はなく、汚染された飲料用水となっている。電力供給、地方の場合は一日1～4時間の限定供給であり、水道どころか日常生活に大きな影響を及ぼしている。NASA（米国航空宇宙局）の衛星写真では、北朝鮮の電力事情が一目で分かる」

日本はシステム提案を

――北朝鮮の水問題を解決するには。

「北朝鮮トップも水問題解決に重大な関心を示しているが、軍事費の増大、食料不足などで手が回らない状態である。まずは電力不足の解消であり、特に農村部の解決が急務であり日本が貢献できる場であろう。

具体的には北部山間部は降水量が多いので流域に合わせ中小のダムを造り、重力で浄水場まで導水し、その過程で小水力発電を行い電力を得て飲料水を供給する。浄水汚泥は肥料として活用するシステム提案である。

大きなことを言えば『拉致問題の解決は、水問題の解決から』である。政治的には異論が続出であろうが、人間として最低限必要な、安全で十分な飲料水を北朝鮮人民に直接提供することが日本人の心の広さであろう」

写真1

写真2